

児童作文・読書感想文 コンクール

入賞作品を紹介します

問 浪江小学校 TEL024(567)3970
問 津島小学校 TEL024(567)6860



左から 瀬尾瑠衣菜さん(6年)、瀬尾悠月さん(3年)、今野笑瑠捺さん(5年)

双葉地区 児童作文コンクール

- 特選 瀬尾瑠衣菜さん(6年)

双葉郡 読書感想文コンクール

- 特選 瀬尾 悠月さん(3年)
- 準特選 今野笑瑠捺さん(5年)

児童作文 特選

私の夢

六年 瀬尾瑠衣菜

私の夢は幼稚園の先生になることです。この夢は、私が一年生の時からずっと変わっていません。私は小さい子どもが好きで、妹が幼稚園のころから折り紙の折り方を教えたり、勉強を教えたりしていました。

私は、福島県で幼稚園の先生になろうと決めています。福島県は私の大切なふるさとだからです。

頑張ることが、避難している他の子どもたちや他の県の人たちに「福島は大丈夫ですよ。」というメッセージを伝えることになるのだと思います。

私は、総合的な学習「ふるさとなみえ科」で仮設住宅を訪問し、浪江町の方々と話をすることがあります。前回の訪問で「私たちに期待することは何ですか。」とたずねてみました。すると、多くの方が、福島の復興の力になって欲しいとおっしゃったのです。私はその時、今まで変わらぬ思い描いてきた私の夢が、みんなの願いをかなえる大きな力になる

のだと思いました。そう思うと、益々、絶対にかねるぞという強い気持ちがわいてきました。私の夢は、なりたいたいと思うだけではかなわないと思っています。そこで私は、幼稚園の先生をめざしていくつかのことに取り組んでいます。一つは、五年生から毎日続けている自主学習です。先生になるためには、今まで以上に進んで学習し、全部の教科をレベルアップしなくてはならないと思っています。初めは何をどう取り組んでいいかわからずいましたが、先生からアドバイスをいただながら毎日続けてい

くと、今、自分に必要な学習が分かってくるようになりました。また、工夫してやるのもおもしろくなりました。二つ目は、水泳やスキーへのチャレンジです。本当は、あまり得意ではないのですが、水泳やスキーができるようになることも大切だと思っています。今年は、ビート板を使わずに泳げるようになりまし。去年のスキー学習では、一番高いところから下りてくることもできました。三つ目は、友達の良いところや頑張りを見つける「心の花」を毎日書くことです。誰かのよいところや頑張っていることを見つけては、とても楽しいし、自分までうれしくなります。そして、みんなのよいところを見つけて、大切なことだと思っています。私は、時々、幼稚園の先生になった自分を想像することがあります。子どもたちと一緒に歌ったり砂遊びをしたりする私は、ひまわりのように笑っています。夢は自分でかなえるものだから、私は、これからも自分の夢に向かって頑張ります。

す。私が通っていた「アスナロ幼稚園」から葉書が届きました。幼稚園の園舎は、東日本大震災で建物がこわれてしまい、お化け屋敷みたいになってしまったと書いてありました。そして、このままでは危険なので取りこわすことが決まったとも書いてあったのです。私は、信じられない気持ちでした。東日本大震災の年まで毎日、先生や友達と一緒に過ごした幼稚園です。今でも忘れられない楽しかった思い出がたくさんあるのです。安全のために取りこわすのは仕方がないと感じているのですが、とてもさびしい気持ちになりました。でも、このことがきっかけで浪江町の幼稚園の先生になりたいという思いがとて強くなったのです。福島県の人たちは、東日本大震災と原発事故のために今でも深い悲しみを抱えています。アスナロ幼稚園の園舎が取りこわされることもその一つです。そして、そのことと重なり合うように、今でもまだ、県外にたくさんの子どもたちが避難しています。放射能に対する恐怖はなかなか消えませんが、私が福島で元気に

かも知れないと改めて思いました。そして、それまでは、ばく然と「幼稚園の先生になる」までだった夢が「福島県で」「浪江町で」というように具体的になっていったのです。アスナロ幼稚園が一日でも早く始められるように私にできることがあれば応援していきたいと思っています。私が幼稚園の先生になると決めた理由はもう一つあります。それは保育所や幼稚園に入りたくても入れない小さい子どもたちがたくさんいることをニュースで知ったからです。そのとき「待機児童」という言葉を初めて知りました。保育園や幼稚園に入れない子がいるのは、先生が足りないことも原因の一つだと思います。小さい子どもを育てている人たちは、本当に困っているにちがひありません。私が幼稚園の先生になることで、少しでも困っている人たちの役に立てたいなと思っています。私の夢は、自分だけの夢でなく、ふるさと「福島」ふるさと「浪江」の復興の力になるもの、そしてまた、困っているたくさんの子どもたちの助けとなるものな

と、今、自分に必要な学習が分かってくるようになりました。また、工夫してやるのもおもしろくなりました。二つ目は、水泳やスキーへのチャレンジです。本当は、あまり得意ではないのですが、水泳やスキーができるようになることも大切だと思っています。今年は、ビート板を使わずに泳げるようになりまし。去年のスキー学習では、一番高いところから下りてくることもできました。三つ目は、友達の良いところや頑張りを見つける「心の花」を毎日書くことです。誰かのよいところや頑張っていることを見つけては、とても楽しいし、自分までうれしくなります。そして、みんなのよいところを見つけて、大切なことだと思っています。私は、時々、幼稚園の先生になった自分を想像することがあります。子どもたちと一緒に歌ったり砂遊びをしたりする私は、ひまわりのように笑っています。夢は自分でかなえるものだから、私は、これからも自分の夢に向かって頑張ります。

読書感想文
特選

「きょうから飛べるよ」
を読んで

三年 瀬尾 悠月

この本の題名を見た時、わたしは、「だれが飛ぶのだろう。表紙には女の子が紙ひこうきを見上げている絵がかいてあるけどー。」と思い、その答えを見つけたくなって読みはじめました。

この表紙の女の子は、さくらさん。もうすぐ四年生になるという春休みに、高ねつを出して入院してしまったのです。わたしも入院したことがあるので、さくらさんの気もちが少し分かります。注しや点てきはいたいのに、がんばってもよくならないとえ顔になんてなれない。いくら食べないと元気が出ないと言われても、どうせ……と

思ってしまったすよね。でも、花さかじいさんからの手紙で、「さあ、行動をおこせ。じっこうあるのみだ。」というのを読んだら、さくらさんは、歩き出しました。力強いこの言葉にせ中をおされる感じで、花さかじいさんは、きつと向かいの病室からさくらさんを見て、ずつとおうえんしていたんだと思います。おじいさんの手紙に書いてあった木を見つけたら、そこには小鳥のすがありましたね。さくらさんが名前をつけた「クロジとジュンコ」のす。そして四つの小さなたまご。たまごからひなになって、どんどん大きくなるのをわたしもさくらさんといっしょにわくわくしながら読みました。きつとさくらさんもそのわくわくを伝えたくて、おじいさんにたくさんのお手紙を書いたんですよね。手紙の交流で、二人の心が強くつながっていくのを感じ

ました。さくらさんのかんさつを通して、わたしは親鳥はすごいなあと思いました。毎日子どものためにえさを運んだり、雨がふると羽を広げて子どもたちを守ったり。さくらさんが、鳥も人間も家族を思う気もちと同じだねって言ったのが、分かる気がしました。わたしも家族に守ってもらっているなあと思っています。また、一番心にとっっている場面は、ひなたたちがすからとび立つ日のことです。親鳥たちが近くの木の上で鳴くの聞いて、さくらさんには、「きょうから飛べるよ。さあ、みんな出ておいで。だいじようぶ。きょうから飛べるよ。」と言っているように聞こえたんですね。そしてそのしゅん間、ひなたたちは飛び立っていききました。きつと、こわくても勇気を出して飛び出したのだと思います。

この日、花さかじいさんは、天国へ旅立ちました。さくらさんは元気になってたい院し、いっぱいがんばってバレーリナーになったけど、つらい時はいつもおじいさんの声が聞こえたそうです。「きょうから飛べる。明日も飛べる。だいじようぶだ。心配するな。」と。まるで親鳥のよう。に。「きょうから飛べる。」は、さくらさんの心の声だったんですね。わたしは、この言葉がとてもすきになりました。

わたしは、家の都合で、四年生になる時に転校しなくてはなりません。そのことで、このころ少し心配になることがあります。でも、この言葉が、わたしを強くしてくれる感じがします。わたしも飛べるかな。だいじようぶだよ。勇気を出してがんばりたいです。

読書感想文
準特選

「地震のはなしを
聞きに行く」を読んで

五年 今野笑瑠捺

私がこの本を選んだ理由は、作者である須藤さんと同じ東日本大震災を経験したからです。私の家族は無事でしたが、大切な家族を亡くしてしまった人の気持ちを知りたいと思いました。

須藤さんは、宮城県気仙沼市で船の整備をしていたお父さんを、津波で亡くしました。遺体が見つかったのは、地震から十五日後でした。その日から全て忘れたふりをして、笑って過ごしていたそうです。きつとお父さんが大好きだったから、忘れなかったのだと思います。わざと明るく過ごすのは、毎日の暮らしを続けるのに楽だったと書

いていました。でも本当は、だれかに話したかったのではないのでしょうか。

一度は震災のことを忘れようとした須藤さんでしたが、お父さんがなぜ死んでしまうことになったのか、地震と津波のことを知りたいという気もちに変わっていききました。悲しい現実に向き合えば、またつらい気持ちになるかもしれません。でも須藤さんは前を向き、地震や津波について調べ、この本を書くことで、私たちにたくさんのお話を教えてくれました。

日本には、地震の被害が少なくなるように研究が続いている人がたくさんいるそうです。地震には、プレート（動くもの）の動きによるものと活断層の動きによるものがあり、日本中どこでも地震は起こりうるそうです。地震学者の松澤さんは、「地震についての研究成果を知ってもらえるよ

う努力してきたが、まだまだ足りない。もつと伝えていかなければ。」と言っています。私たちは知る努力が必要です。それは日本が、元々地震によって今の形になっていて、地震がとても多い国だからです。私たちは、自分たちの住む地域の地震の歴史を知ること、様々な準備ができるはずなんです。

もう一つ大切なことは防災と減災です。専門家の河田さんは「防災・減災は文化」と説明していました。例えば玄関でくつをそろえる事だけでも、逃げる時に役立つそうです。これはすぐに始められる事です。東日本大震災で岩手県釜石市の小中学生が全員逃げ切れたことは、奇跡ではなく防災教育があったからだと聞いています。とても心にひびきました。

最後に須藤さんは、大切な人を失うことのないように、一人

一人が自分の事としてこの震災を考えてほしいそうです。この本を読んだ人にその想いが伝わり、地震に関心を持つ人や、防災や減災を真剣に考える人が増えてほしいと思います。

地震の時の避難場所や持ち物を家族と話し合うこと、家族のスケジュールを毎日聞いておくこと、地域の人も絆を深めて協力できるようにしておくこと、この本を読み終えて、私がいよいよと思っっていることです。あの日の記憶と戦いながらも、必死で私たちに伝えようとした須藤さんのメッセージをしっかりと心に受け止め、私もできることをして自分と大切な人たちの命を守っていききたいです。